

施設入居後の高齢女性の主観的幸福感について

—友人関係と高齢期の生き方を中心に—

スズキ ヨリコ
鈴木 依子*

目的 施設入居後の環境適応について、高齢期の望ましい生き方に対する志向の違いによって、友人関係の形成に差があるかどうかを検討した。また、主観的幸福感が、高齢期の望ましい生き方の認識や施設入居後の友人関係形成に関連があるかどうかを検討することを目的とし、今後、高齢期に住み替えを行う場合の基礎資料を得ることとした。

方法 対象者は東京都のケアハウスの居住者で、都内のケアハウスに調査協力を依頼し、生活相談員を通して調査趣旨に賛同の得られた居住者に対して、調査票を配布し無記名での回答を求め、郵送により回収した。有効回収数は428、有効回収割合は71%であった。施設職員による代理回答は求めなかった。このうち配偶者のいない女性278名のデータのみを用いた。調査内容は、基本属性、高齢期の生き方、友人関係、主観的幸福感とした。

結果 「変化・挑戦志向」の生き方をしている者は、主観的幸福感が高かった。提供サポートと受領サポートには主観的幸福感との関連が見られなかった。ただ、生き方が消極的な群で提供サポートに満足している場合に主観的幸福感が高かった。

結論 消極的な生き方の者が主観的幸福感を得ることができるように、彼らが施設内の友人に対して、サポートを提供できるような環境を整えることの重要性が示唆された。

キーワード ケアハウス入居者、高齢期の生き方、友人関係、主観的幸福感

I はじめに

高齢期の住まいの住み替えは、移行後の環境への適応に大きな困難が伴う¹⁾といわれている。

そこで福祉施設等への住み替えを行った高齢者の入居後の生活への適応について、友人との関係を通して検討することとした。その理由は、福祉施設に入居している高齢者の多くは、高齢の夫婦や一人暮らしの高齢者であり、インフォーマルな社会関係としての友人関係が施設入居後の新しい環境で重要な位置を占める²⁾といわれているからである。高齢者にとって、インフォーマルな社会関係で最初に支援を期待されるのは配偶者である。配偶者がいない場合や

配偶者から十分な支援を得られないときは子ども、子どもからも十分な支援が得られないときには親族や友人が期待されることになる。この階層的補完モデル³⁾における説明からも、施設入居者にとっての友人関係が重要であることが説明できる。

一方で高齢期の生き方は向老期からの生き方を継続していること⁴⁾が明らかとなっている。施設入居後も高齢期の生き方に変化がないならば、高齢者が施設入居後の環境に適応するための友人関係形成に、向老期の生き方が関連している可能性がある。そこで、高齢期の望ましい生き方に対する認識の違いによって友人関係形成に差があるかどうか検討することを第1の目的とした。

また、高齢女性の友人関係は「近所づきあ

* 京都女子大学家政学部生活福祉学科准教授

い」に集中している²⁾といわれており、友人や近隣と会う頻度など、交流が活発であるほど、主観的幸福感が高いとの報告もある⁵⁾⁶⁾。特に、配偶者がいない高齢女性の友人関係では、提供サポートが多いほど主観的幸福感が高く、高齢者が他者のために役立てることの重要性が確認されている⁷⁾が、施設入居後の高齢女性の友人関係についての報告は見当たらない。加えて中原ら⁸⁾によると、向老期世代は高齢期に変化・挑戦的な生き方、すなわち積極的で活動的な生き方を望んでいる者が多く、そのことが主観的幸福感と関連しているといわれている⁹⁾。

そこで、主観的幸福感が、高齢期の望ましい生き方に対する認識や施設入居後の友人関係形成に関連があるかどうかを検討することを目的とし、今後、高齢期に住み替えを行う場合の基礎資料を得ることとした。

Ⅱ 方 法

(1) 調査対象者

調査は、2012年6～8月に、東京都のケアハウスの居住者を対象として実施された。都内のケアハウスに調査協力を依頼し、生活相談員を通して調査趣旨に賛同の得られた居住者に対して、調査票を配布し無記名での回答を求め、郵送により回収した。施設職員による代理回答は求めなかった。ケアハウス居住者428人より回答を得た(回収割合71%)。回答者の性別は男性22.4%、女性77.6%であった。本研究においては、このうち配偶者のいない女性278名のデータのみを用いた。

なお、ケアハウス居住者を調査対象者に選択した理由は、ケアハウスは「自炊が出来ない程度の身体機能低下があり、独立して生活するには不安が認められ、家族による援助を受けることが困難な者」を対象とした入居型生活施設として、すまいの住み替えの有力候補と考えたからである。

また、高齢単身・夫婦のみ世帯が増加するなか¹⁰⁾、高齢者自身は住み替えの時期を、「自分で判断・行動ができる元気な時」や「一人暮ら

しになった時」と考えていることから¹¹⁾、ケアハウス居住者を調査対象者とすることにした。

(2) 調査内容

1) 基本属性

年齢、最終学歴、入居年数、子どもの有無、について質問した。

2) 高齢期の生き方

中原・藤田⁴⁾が使用している、高齢期の望ましい生き方に関する13項目のうち、「新しいことを始める」「色々なことをやってみる」「変化のある暮らしをする」「人間関係を広げる」「社会のために尽くす」「若い人とつきあう」「努力して頑張る」の7項目について、「とてもそうしている」から「まったくそうしていない」までの5件法で回答を求め、順に5点から1点までの得点を与えた。この高齢期の望ましい生き方に関する7項目について主成分分析を行った結果、すべての項目がまとまったので、合計得点を「変化・挑戦志向」の生き方得点として算出した。

(3) 友人関係

友人関係については、ケアハウス入居後に知り合った親しい友人を1人思い浮かべて回答してもらった。友人関係を測定するにあたって、受領サポートに関する質問は、「心配事や悩みを聞いてくれた」と「ちょっとした用事やお使いをしてくれた」であり、提供サポートに関する質問は、「心配事や悩みを聞いてあげた」と「ちょっとした用事やお使いをしてあげた」であった。その頻度を、「満足している(3点)」「ふつう(2点)」「満足していない(1点)」の3段階で得点化した。

入居後に施設内で知り合った(以下、施設内)親しい友人関係を、受領サポートと提供サポートに分けて、それぞれについて主成分分析を行った結果、すべての項目がまとまったので、受領サポートの2項目の合計得点を施設内の友人からの受領サポート得点として算出し、また提供サポートの2項目の合計得点を施設内の友人への提供サポート得点として算出した。項目

の内容から、それぞれの得点は、得点の高いほうが友人関係が良いことを意味している。

(4) 主観的幸福感

主観的幸福感の指標には、古谷野ら¹²⁾の生活満足度尺度K (LSIK) の合計得点を用いた。このスケールは9項目より構成されており、「はい」「いいえ」の選択肢に基づき回答を得るようになっている。主観的幸福感の得点範囲は、0～9点で、得点が高いほど主観的幸福感が高いことを示す。

(5) 倫理的配慮

自記式質問紙によるアンケート調査で、調査

項目は本人が特定されない質問項目で構成されており、無記名方式をとった。調査対象者には依頼状を通して、個人情報保護や得られたデータは研究目的のみで使用することを説明した。

Ⅲ 結 果

(1) 基本属性

回答者の年齢は60～96歳、平均年齢は82.4歳であった。別居子のいるものは、60.4%だった。入居年数は5年以上のものが46.8%であった(表1)。

(2) 友人関係

施設内の親しい友人関係に、子どもの有無によって差がみられるかを検討した。提供サポート得点は、子どものいる者の得点が高かった ($p < 0.05$)。受領サポート得点には有意差がみられなかった(表2)。

同様に、施設内の親しい友人関係に、入居年数の違いによって差があるかどうかについて検討した。入居年数5年未満と5年以上の2群間で受領サポート得点、提供サポート得点のいずれにも有意差はみられなかった(表2)。

受領サポート得点の平均値3.3で満足度を高群と低群に、提供サポート得点の平均値3.5で満足度を高群と低群に分類した。クロス集計の結果

表1 対象者の基本属性 (n=278)

	人数	割合 (%)
最終学歴		
小学校卒業・中学校卒業	46	16.5
高等学校卒業・大学卒業	232	83.5
別居子		
あり	168	60.4
なし	110	39.6
入居年数		
5年未満	148	53.2
5年以上	130	46.8

表2 子どもの有無・居住年数別の友人関係得点 (受領サポート・提供サポート)

	子ども				入居年数			
	N	平均値	標準偏差	t 値	N	平均値	標準偏差	t 値
受領サポート：あり	168	3.4	1.2	1.3	5年以上	130	3.4	1.3
：なし	110	3.2	1.0		5年未満	148	3.2	1.1
提供サポート：あり	168	3.6	1.1	2.5*	5年以上	130	3.5	1.0
：なし	110	3.3	1.0		5年未満	148	3.4	1.1

注 * $p < 0.05$

表3 受領サポート得点と提供サポート得点の関係

(単位 人、() 内 %)

	合計	提供サポート得点	
		低群	高群
合計	278	132	146
受領サポート得点：低群	164	114(69.5)	50(30.5)
：高群	114	18(15.8)	96(84.2)

注 $p < 0.001$

表4 高齢期の生き方別の友人関係得点

(受領サポート・提供サポート)

	高齢期の生き方			
	N	平均値	標準偏差	F 値
受領サポート：生き方消極	84	2.9	1.0	6.7***
普通	102	3.5	1.2	
積極	92	3.4	1.1	14.7***
提供サポート：生き方消極	84	3.0	1.1	
普通	102	3.6	1.0	
積極	92	3.9	1.0	

注 *** $p < 0.001$

表5 主観的幸福感に対する高齢期の生き方・友人関係得点の影響（分散分析）

	受領サポート	N	平均値 (標準偏差)	F 値			提供サポート	N	平均値 (標準偏差)	F 値		
				「変化・挑戦志向」的 生き方	受領サポート	交互作用				「変化・挑戦志向」的 生き方	提供サポート	交互作用
主観的幸福感：生き方消極 普通 積極	低群	76	2.8(2.1)	11.1***	1.4	4.3*	低群	70	2.7(2.0)	12.8***	2.7	4.4*
	高群	32	4.1(1.8)				高群	38	4.2(2.0)			
	普通	40	3.9(2.4)				低群	34	3.9(2.2)			
	高群	38	4.3(2.4)				高群	44	4.3(2.6)			
	積極	48	5.3(2.1)				低群	28	5.4(1.9)			
	高群	44	4.6(2.1)				高群	64	4.8(2.2)			

注 *** $p < 0.001$, ** $p < 0.01$, * $p < 0.05$

から受領サポートに満足しているものは、提供サポートにも満足していた ($p < 0.001$) (表3)。

「変化・挑戦志向」的生き方を、「積極群」「普通群」「消極群」の3群に分類した。3群の割合は、積極群31.9%、普通群39.2%、消極群28.9%となっている。「変化・挑戦志向」的生き方得点によって、友人との受領サポート得点と提供サポート得点に差がみられるかどうかについて検討した。その結果、生き方の「積極群」「普通群」「消極群」の3群間で、受領サポート得点に有意差がみられた ($p < 0.001$)。生き方の「普通群」が「積極群」「消極群」よりも受領サポートの満足度が高いことがわかった (表4)。

一方、生き方の「積極群」「普通群」「消極群」の3群間で、提供サポート得点にも有意差が見られた ($p < 0.001$)。「変化・挑戦志向」的生き方得点が高いほど提供サポートの満足度が高いことがわかった (表4)。

(3) 主観的幸福感

高齢期の望ましい生き方として「変化・挑戦志向」を志向する生き方と施設内の友人からの受領サポートによって、主観的幸福感に差がみられるかどうか検討した。「変化・挑戦志向」的生き方の合計得点を「積極群」「普通群」「消極群」の3群に分け、施設内の友人からの受領サポートの満足度については「高群」「低群」の2群に分けた。友人からの受領サポートの違いは主観的幸福感に有意な差をもたらさなかったが、「変化・挑戦志向」的生き方志向の主効果が有意であった ($p < 0.001$)。そして、「変

化・挑戦志向」的生き方と受領サポートの交互作用 ($p < 0.05$) に有意差がみられた。受領サポートに満足していない群では、積極的な生き方の者ほど主観的幸福感が高いことがわかった (表5)。

高齢期の望ましい生き方として「変化・挑戦志向」を志向する生き方と施設内の友人への提供サポートによって、主観的幸福感に差がみられるかどうか検討した。「変化・挑戦志向」的生き方の合計得点を「積極群」「普通群」「消極群」の3群に分け、施設内の友人への提供サポートの満足度については「高群」「低群」の2群に分けた。友人への提供サポートの違いは主観的幸福感に有意な差をもたらさなかったが、「変化・挑戦志向」的生き方志向の主効果が有意であった ($p < 0.001$)。そして、「変化・挑戦志向」的生き方と提供サポートの交互作用 ($p < 0.05$) に有意差がみられた。消極的生き方の群では、提供サポートに満足している者のほうが主観的幸福感が高いことがわかった (表5)。

IV 考 察

(1) 友人関係

1) 別居子

施設入居後の配偶者のいない高齢女性にとって、施設内の親しい友人からのサポート受領と別居子の有無には関連がなかった。施設内の親しい友人からのサポートの受領は、別居子のいない場合、施設内の親しい友人を、別居子の支援機能を代替し、補完する関係ととらえていな

いことがわかった。

提供サポートについては、別居子のいる者のほうが、高い満足感を示していることが明らかとなった。施設入居後の配偶者のいない女性高齢者にとって、別居子の存在が親友への積極的なサポートの提供につながったといえる。

2) 「変化・挑戦志向」を志向する生き方

施設内の友人からのサポートの受領に満足している者は、「変化・挑戦志向」を志向する生き方のうち、積極的な生き方や消極的な生き方よりも普通の生き方を志向していることが明らかとなった。受領サポートについては、サポートのみが多い者は負担感を感じるという報告¹³⁾や、高齢者の自尊心または自立性を損なう可能性があるといわれている⁷⁾。本研究では、受領サポート特有の心理的負担感を感じることなく、友人からのサポートを受領できたのは、普通の生き方を志向している者であることが示唆された。

一方、施設内の親しい友人への提供サポートに満足している者は、「変化・挑戦志向」を志向する生き方のうち、消極的な生き方や普通の生き方よりも積極的な生き方を志向していることが明らかとなった。自分の提供するサポートが十分であると感じることは、サポートを提供する人の社会的な有用感に影響を及ぼし、自尊感情を高める¹⁴⁾といわれていることから、サポートの提供が、施設入居後の高齢女性の心理的側面に肯定的な影響を及ぼしているといえる。

(2) 主観的幸福感

友人関係と主観的幸福感については、友人関係が良好な者のほうが幸福感が高いと、和田ら⁹⁾の報告で示されている。しかし、本研究では友人からの受領サポートも友人への提供サポートも、主観的幸福感と直接の関連は見いだせなかった。ただ、親しい友人からの受領サポートの満足度が低い群では、「変化・挑戦志向」を志向する生き方のうち、消極的な生き方や普通の生き方よりも積極的な生き方の者の主観的幸福感が高いことが明らかとなった。たとえば、親しい友人からの受領サポートに満足して

いなくても、積極的な生き方を志向している者は主観的幸福感が高いといえる。

また、自ら望んで積極的な生き方を行うことは心理的にポジティブな効果を持つことから主観的幸福感が高くなる⁸⁾といわれており、本研究でも施設入居後に、高齢期の望ましい生き方として「変化・挑戦志向」的生き方を志向している者ほど、主観的幸福感が高いことが明らかとなった。

ただ、「変化・挑戦志向」を志向する生き方のうち、生き方の消極的な群についても、友人への提供サポートに満足していれば主観的幸福感が高くなることがわかった。消極的な生き方の者でも、親しい友人へのサポートの提供は、高齢期の役割喪失が引き起こす社会的参加の機会の減少⁵⁾に歯止めをかけ、施設で生活している高齢者が社会的承認を得る機会につながるといえる。高齢者の社会関係の再構築には困難が伴う¹⁵⁾との報告もあるが、消極的な生き方の者が主観的幸福感を得るためには、彼らが施設内の友人に対して、満足のいくサポートを提供できるような環境整備が求められる。

施設入居により限られた空間と機会のなかで、「変化・挑戦志向」を志向する生き方のうち、消極的な生き方の者にとって、友人関係の再構築はその後の環境への適応を高める上で重要であることが示唆された。

(3) 今後の課題

福祉施設への入居は高齢者にとって新たな適応を要求される場であり、高齢期の生き方と友人関係から検討を行ってきた。ただ今回調査した友人関係については、施設内で知り合った親しい友人1人とのサポートの授受に限って検討したため、その他の友人からの影響も考慮する必要があるだろう。したがって、施設入居後の高齢女性の主観的幸福感として一般化するには慎重になる必要がある。

高齢期の望ましい生き方については、継続的な生き方を行うことで満足感を得ることができるといわれている¹⁶⁾¹⁷⁾といわれているが、施設入居という高齢期のすまいの住み替えによる環境移行には大き

な困難が伴う¹⁾ことから、生き方の継続性が阻害されないように入居前と同様の生き方が送れるような環境についての検討も望まれる。

また、友人関係と同様に、高齢女性の環境適応にとって重要な役割を担っている、施設内の福祉専門職との関係についても今後検討していく必要性がある。

文 献

- 1) ワップナー S, 山本多喜司. 人生移行の発達心理学. 北大路書房, 1991.
- 2) 前田高子. 老年期の友人関係; 別居子関係との比較検討. 社会老年学, 1998; 28: 58-70.
- 3) Conter MH. Neighbors and friends: An overlooked resource in the informal support system. *Research on Aging*, 1979; 1: 434-6.
- 4) 中原純, 藤田綾子. 都市前期高齢者の向老期と現在の生き方. 厚生指標, 2009; 56(4): 35-9.
- 5) 藤田綾子. 老年期の友人関係と生活満足度. 老年心理研究, 1981; 7(2): 50-60.
- 6) 野口裕二. 高齢者のソーシャルネットワークとソーシャルサポート; 友人・近隣・親戚関係の世帯類型分析. 老年社会学, 1991; 13: 89-105.
- 7) 金恵京, 甲斐一郎, 久田満. 農村在宅高齢者におけるソーシャルサポート授受と主観的幸福感. 老年社会科学, 2000; 22(3): 395-404.
- 8) 中原淳, 藤田綾子. 向老期の世代の現在の生き方と高齢期に望む生き方の関係. 老年社会科学, 2007; 29(1): 30-6.
- 9) 和田実. 高齢者の同性友人関係の性差-現実, 期待, そのズレと主観的幸福感の関連-. 老年社会科学 2012; 34(1): 16-28.
- 10) 高齢者すまい法の改正について. 国土交通省 2012. (http://www.satsuki-jutaku.jp/doc/system_panfu_00.pdf) 2013.12.8.
- 11) 高齢者のすまいに関する意識調査 シニアライフ情報センター 2008.
- 12) 古谷野亘, 柴田博, 芳賀博, 他. 生活満足度尺度の構造; 主観的幸福感の多次元性とその測定. 老年社会科学, 1989; 11: 99-115.
- 13) Buunk BP, Doosje BJ, Jans LGJM, et al. Perceived reciprocity, social support, and stress at work: The role of exchange and communal orientation. *Journal of Personality and Social Psychology*, 1993; 65(4): 801-11.
- 14) 日下菜穂子, 篠置昭男. 中高年者のボランティア活動参加の意義. 老年社会科学, 1998; 19(2): 151-9.
- 15) 菅原育子, 片桐恵子. 中高年者の社会参加活動における人間関係; 親しさとその関連要因の検討. 老年社会科学, 2007; 29(3): 355-65.
- 16) 小田利勝. サクセスフルエイジングの研究. 学文社, 東京 2004.
- 17) Atchley RC. A continuity theory of normal aging. *The Gerontologist* 1989; 29: 183-90.